

column

アート・アクティヴィズム92
高橋健太郎の「A Red Hat 赤い帽子」展
——治安維持法下の「生活図画事件」

北原恵

(1) はじめに

「なぜ、生活を描くことが危険なのか？ 生活を描いて捕まるのなら、僕だって捕まると危機感を抱いた。」

写真家・高橋健太郎に、なぜ80年も前の生活図画事件をテーマに作品を作ったのか尋ねたとき、即座に返ってきた答えである。

生活図画事件とは、1941年から翌年にかけて北海道旭川で起きた美術教育への弾圧事件である。このとき、身の回りの日常生活をありのままに描く美術教育運動「生活図画」を實踐していた旭川師範学校と旭川中の美術教師と教え子らが、「共産主義を啓蒙する」と特高警察に見なされ、26名が逮捕・送検。18名が起訴され3名が有罪判決

を受けた。

美術界でもほとんど知られていないこの事件をテーマに、若い写真家が作品を制作していること友人Sが教えてくれた。なぜこの問題を、今、扱うのか？ 10月、興味を惹かれてKYOTOGRAPHIE 2020の高橋健太郎の展示「A RED HAT 赤い帽子」を見に行き、お話をうかがってきた「1」。

(2) 高橋健太郎の写真展「レッド・ハット」

高橋健太郎の作品は、元・淳風小学校の校舎で開催中の若手写真家たちによる「KG + SELECT2020」展の一部として展示されていた。京都の西本願寺のすぐそばにある淳風小学校

は、明治2年に創設されたが、児童数の減少のため3年前に閉校になったばかりである。古い校舎はタイル張りの階段やアーチ形の天井が美しく、子どもたちが使っていた手洗い場もまるで今すぐ使えそうに見える。

東日本大震災の経験、香港の民主化、性暴力の被害者へのインタビュー、捕鯨、釜ヶ崎で暮らす人々の日常、モノを過剰にため込んだ部屋、限界集落のかかし制作など、どの作品も社会の断片から現在を鋭く問いかける作品だ。

同展に集められたこれらの10人の若手写真家たちの作品は、それぞれひとつずつ教室を使って展示されていた。高橋の作品は、一階の一番奥の元理科室にあった(図版1)。教室には、高橋の写真や生活図画事件の資料が並べられ、前方の黒板にチョークで「生活図画事件」の概要が、人物を中心にわかりやすく説明されている。大書さ



図版1 高橋健太郎「A RED HAT」展会場(京都 元淳風小学校) 2020年10月12日筆者撮影

真を撮る行為はテロ等準備罪の下見にあたる」という金田法務大臣(当時)の発言を聞き、「写真家として生きる自分に間違いなく降り掛かること」だと、突然身近に感じたという「2」。例

の「花見にスマホ持参で逮捕」発言である。危機感を抱いた高橋は、治安維持法違反で捕まり今も存命中の人をネットで探したところ、生活図画事件を初めて知ることになる。そして生き証人の菱谷と松本に会うため、数日後、北海道に飛んだ。それ以来3年間、月に1度、北海道に通い、時折絵筆をとる2人の日常生活を撮り続けてきた。

展示会のタイトルとなった「レッド・ハット」とは、赤い帽子を被った菱谷の自画像(赤い帽子の自画像)に因んでいる。「アカの容疑」かけられ有罪に仕立て上げられたことへの怒りから、仮釈放後の1943年2月11日、ベニヤ板に描いた油彩画だ(図版2)。高橋は、今夏、

このタイトルを採って二人の日常や生活図画事件についてまとめた写真集「A RED HAT」(赤々舎)を出版した。

(3) 生活図画事件

では、生活図画事件とは具体的にどのような事件だったのだろうか？

事件は、松本と菱谷たちが旭川師範学校の卒業を間近に控えた1941年1月に始まる。卒業後の教師の職も決まっていた。だが美術部顧問の熊田満佐吾と北海道級方教育連盟の教師53名が検挙されたことから、彼らの人生は暗転する。2カ月前の生活級方関係者の第一次検挙



図版2 菱谷良一「赤い帽子の自画像」油彩 1943年2月11日

に続く大掛かりな弾圧だった。熊田の検挙理由は、学内で美術部やルネサンス研究会、レコード研究会などを通じて危険思想を広めたことだとされ、会に参加していた学生たちは学校から厳しい取り調べを受けることになる。5人が留年、1人が放校になった。留年処分を受けた松本・菱谷らの5人は、学校による執拗な思想矯正を受けたが、翌年には卒業できるとまだ信じていた。

だが、1941年9月20日、突然の逮捕。学生たち26名がこのとき検挙された。共産主義も何も知らない学生たちを有罪にするため、特高は最初、取り調べをせず情報のないまま留置場に閉じ込め、巧みに誘導していく。松本は「髪の毛が針金になった感じ」がするほど追い詰められ、自白の強要に従った。だが、いきなり「プロレタリアの芸術論を書け」と言われても、何の知識もない松本や菱谷に書ける

はずもなく、特高はマルクス主義の本を目の前に置きそれを読んで手記を書くよう迫った。自白は完全な捏造だった。

旭川刑務所の冬は零下30度を下回る過酷な寒さである。凍傷にならないように一日中顔をこすり、生き延びるだけで精いっぱいの日々が続く。42年暮れ、仮釈放され、翌年下った刑は有罪1年半、執行猶予3年だった。

松本も菱谷も軍隊に徴兵され、戦後はそれぞれ教員や会社員の職を全うし、絵を描き続けた。かつての同級生の仲間たちと機関誌「凍土」を定期的に発行して交流を続け、最近では、それまで沈黙していた自らの体験を伝えて共謀罪の危険性を訴える活動を開始した。

1925年に成立した治安維持法は、30年代半ばに共産党壊滅の目的を果たしたのちも、法改正を続けて拡大解釈と乱用を重ねていく。検挙者は全国で6万8千名、起訴6500名、

続いていた。息子が幼いとき、物陰に隠れて「わ！」と菱谷を驚かせたことがあった。びっくりした菱谷は部屋の片隅に逃げいき、そこで立ち上がれなくなってしまう。母はお父さんにそんなことをしてはいけないと言ったが、息子は大きくなるまで理由を知らなかった。

体験を語りだしたのは、1988年、旭川の高校の新聞部の生徒たちが取材に来たのがきっかけだった。市民の間で過去の歴史を知ろうとする人が出てきたことが支えになった。

2年前の晩秋、菱谷の誕生日に、高橋は何かしたいことはないかと尋ねた。菱谷は旧・旭川師範学校（現・北海道教育大学旭川校）に行きたいと答える。逮捕以来初めて大学の職員と話をしたあと、菱谷は「なんだか肩の荷がおりた思いだな」と語ったという。そのとき撮った大学敷地の池の端のベンチに腰掛けて空を見上げる菱谷の写真



図版5 北海道教育大学旭川校（旧旭川師範学校）敷地で行む菱谷さん、写真：高橋健太郎 2018年 ©Kentarō Takahashi

がとて面白い（図版5）。地面を覆う紅葉した落ち葉と透明感のある水から、凛とした清々しさと厳しさが伝わってくる。彼らはまだ退学扱いのままである。

この原稿を書いているときネットを見ていたら、いきなり

「1」高橋健太郎（1989年、横浜生）。青山学院大学卒業と同時に、スイスの写真家 Andreas Seberty に写真を教わる。多摩川を題材にした「川床」[HIROSHIMA2015] など。

「2」高橋健太郎「レンズを通して観る、「無二の親友」たち」『治安維持法と現代』No.39、2020年4月、86頁。

「3」司法省刑事局「生活図画教育関係治安維持法事件資料」『昭和思想統制史資料』15巻、1980年、24、27頁。

*参考：菱谷良一「生活図画事件―獄中記」2006年・松本五郎・自画像松本五郎の足跡を出版する会編『自画像 松本五郎の足跡―生活図画事件を体験した美術教師』2007年・NHK「E.T.V.特集」取材班「証言 治安維持法」NHK出版新書、2019年。

「きたはらめぐみ・戦時下の視覚文化と社会について」研究中。主な著作に『アート・アクティヴィズム―攪乱分子@境界』(ともにインパクト出版会)、編著に『アジアの女性身体はいかに描かれたか』(青弓社) など。

400名以上が拷問などで亡くなった。宗教団体や非政治的なグループも弾圧され1940年代には日常生活や社会の有様を見つめる作文や絵画も処罰対象となった。1941年3月、治安維持法が再改正されたのは、まさに松本ら学生が逮捕される直前だったのである。

1932年頃から40年にかけて、美術教師の熊田満佐吾（旭川師範学校）と上野成之（旭川中学校）、その教え子たちが実践した美術教育は、型にはまった教育ではなく、リアリズムの図画を通して身の回りの生活を見つめさせ、自らと現実の生活のより良い変革を目指すものだった。

彼らが治安維持法違反に問われた絵画は警察に没収されほとんど残っていないが、モノクロ写真で図版は確認することができ、松本五郎が逮捕される前年に描いた油彩画《レコードコンサート》と《休憩時間》は、



図版3 松本五郎《レコードコンサート》油彩 1940年

美術部顧問の熊田の自宅で学生らが音楽鑑賞を楽しむ様子や、勤労働員の休憩時間にお喋りする学生の姿を描いたものだが、学生らが「良からぬことを考えている」と治安維持法違反に問われた（図版3）。菱谷良一が、本を手にとって議論する学生を描いた油彩画《話し合う人々》は、「マルクスの本を見ながら共産主義の討論をしている」と断じられた（図版4）。

熊田満佐吾の《測量隊の話》は、旭川市博物館が所蔵し現存する当時の貴重な油彩画だ。明



図版4 菱谷良一《話し合う人々》油彩 1940年

かりの下でクラブに魅入る2人の青年をとらえたこの作品は、押収された熊田の《ヤンガーゼネレーション（若い世代）》と構図も場面もよく似ている。このほかにも吹雪の中を通学する児童を描いた絵は、「吹雪ハ客観的資本主義社会ノ実現ヲ風ヲ以テ象徴」したものとされ、小学生の勤労作業は「階級意識ヲ如実ニ表現シアリ」と解釈され、治安維持法の証拠として没収された〔3〕。

当初、私は1940年代に生活図画事件が起こったのが不思議

だった。なぜなら、1930年代前半にはプロレタリア美術運動は壊滅させられているからである。調べてゆくうちに治安維持法の改悪の歴史を知り、プロレタリア美術運動と生活図画事件は直接的な関係はなさそうだとわかった。だが、生活を見つめることや、日常を描くことが危険視されるとは、どういうことなのか？ 「単に生活を描いただけの絵」だからこそ、潜在的に持ちえる力に特高たちは恐れられたのではないか。生活図画はプロレタリア運動での新井光子たちの児童画教育の実践と似ているが、両者に共有するのはイデオロギーではなく、美術そのものの理念であろう。それに現代の写真家・高橋が応答したのが、「A RED HAT」である。

（4）深い心の傷ととも生きる生き証人として生活図画事件について公の場で語り始めた松本と菱谷だったが、トラウマは

People's Plan Quarterly (Serial Number 90, 2020)

Contents

Reading the current situation:

No to the gov't attempt to impose the Social Security and Tax Number System on everyone/
Miyazaki Toshio

SDF should not be turned into a force for preventive attacks on enemy land/Sugihara Hiroshi
Restoration of business health of local banks and consolidation of local economies/Taira
Tadahito

Focus: Imagining and designing post-Corona world

Introduction/Shirakawa Masumi

Interview with Goka Kouichi by Shirakawa Masumi, Virus and human society

Designing post-Corona society – decentralized life-oriented systems/Hiroi Yosinori

Can a new after-Corona world arrive? – possibilities of a glocal world system/Furusawa Koyu

A “total process” approach to the 2020 pandemic/Tabata Minoru

Corona crisis as grasped from women's point of view/Takenobu Mieko

The Tokyo metropolitan government under governor Koike – where is it going by riding on
the pandemic emergency?/Nasu Rie

An appeal from a field of medical service/Dairi Hideaki

Civic action for expanded children's rights and more PCR tests/Yoshino Shinji

Interview with Muto Ichiyo by Shirakawa Masumi and Nagasawa Toshio (2): External
pressure of anthropocene should be transformed into a radical force to remake civilization

Our reaction to the Corona panic – a dialogue between two laypersons: Amano Yasukazu,
Matsui Takashi

Serialized articles

Hanazaki Kohei's ramble in the forest of books (3): Kano Masanao and Okinawa

Personal notes from my reading: Shimizu Yasuhisa's “Maruyama Masao and postwar
democracy”/Amano Yasukazu

Reports from key locations: Hiroshima – Walking in military relic island of Ninoshima I
encounter some pieces of history not easy to understand/Tanami Aoe; Nagasaki – The demise
of a Hibakusha shop/Yamaguchi Hibiki; Sapporo – On salmon and Ainu rights/Koizumi
Masahiro

Book review: Noguchi Masahiro, “Max Weber – thinker who struggled with modernity”/
Nagasawa Toshio; Hirai Kazuomi, “Beheiren and the era it worked in”/Ichihashi Hideo;
Mitsui Sayo, Kodama Yuta, “40 years of Takonoki Club in Tama”/Tsuruta Masahide; Hara
Yusuke, “Prohibited nostalgia – Kobayashi Masaru's postwar literature and Korea”/Fujii
Takeshi

Columns: Nagasawa Sensei's high school observation; Art activism: Takahashi Kentaro's
“Red hat” exhibition – a case of police crackdown on the “daily life picture” trend under the
prewar Public Peace Preservation Act

ピープルズ・プラン研究所 (PP 研) 入会のお誘い

- ◆ピープルズ・プラン研究所の活動は、PP 研のめざすものに賛同する会員によって進められます。
- ◆研究所のプログラムに参加し、会員として積極的に活動して下さる方を求めています。
- ◆会員には雑誌『季刊ピープルズ・プラン』をお送りするとともに、ピープルズ・プラン研究所の運営やさまざまなオルタナティブについて議論する場としてメーリングリストも活用していただけます。
- ◆当研究所主催の講座・シンポジウムの参加費割引もございます。
- ◆ぜひ、この機会にピープルズ・プラン研究所の会員・購読会員・賛助会員になってください。

■会費■

研究会員：10,000 円/年

購読会員：6,000 円/年

賛助会員：50,000 円/年

(入会特典：希望バックナンバーを2冊贈呈)

入会申し込みを希望される方は、ピープルズ・プラン研究所
(以下発行欄をご覧ください) までご連絡ください。

季刊
ピープルズ・プラン
90

2020年11月17日発行 定価1300円+税

発行 ピープルズ・プラン研究所
112-0014 東京都文京区関口 1-44-3 信生堂ビル 2F
Tel 03-6424-5748 Fax 03-6424-5749
http://www.peoples-plan.org/jp
E-mail ppsg@jca.apc.org

発売 現代企画室
150-0033 東京都渋谷区猿樂町 29-18 ヒルサイドテラス A 棟 8
Tel 03-3461-5082 Fax 03-3461-5083
E-mail gendai@jca.apc.org

編集長：白川真澄

編集委員：青山薫、天野恵一、大井赤亥、大河慧、海棠ひろ、金子文夫、杉原浩司、
千田有紀、平忠人、竹信三恵子、長澤淑夫、中村勝己、番園寛也、平井玄、
松井隆志、武藤一羊、

表紙デザイン：ブリグラフィックス レイアウト：山猫印刷所

印刷：山猫印刷所